

1. 教育の責任

2026年度の担当科目は（表1）の通りである。

科目名	開講年度	学期	対象学年	種別	受講者数	備考
保育内容言葉	2026	前期	1年生	演習	46名	1クラス
実習指導Ⅰ	2026	前期	1年生	演習	46名	1クラス ※教員4名
実習指導Ⅲ	2026	前期	2年生	演習	45名	2クラス ※教員4名
子ども学ゼミナールⅠ	2026	前期	2年生	講義	7名	1クラス
保育内容言葉の指導法	2026	後期	1年生	演習	46名	1クラス
保育内容総論	2026	後期	2年生	演習	45名	1クラス
実習指導Ⅱ	2026	後期	1年生	演習	46名	1クラス ※教員4名
教育実習	2026	集中	2年生	演習	45名	1クラス

（表1）2026年度 担当科目詳細一覧

2. 教育の理念

保育者養成に携わって概ね11年が経過した。それまでの20年以上にわたる保育現場での経験を基盤として、子どもと保育者が一方的に「教える者」と「教えられる者」になるのではなく、互に関わり合いながら成長する存在であることを、保育者養成校の学生に伝えてきた。保育の場は、子どもも保育者も、それぞれが自らの人生を歩み、成長を続けていく場である。保育者は、子ども一人ひとりの人生に立ちあうと同時に、自らの生き方や人間性にも向き合っている。

今年度は、こうした考えを基盤としながら、「多様な背景や特性をもつ子どもも含めた、一人ひとりに応じた関わりを考える力」を育てることを加える。子どもの言葉や行動を表面的に捉えるのではなく、その背景にある生活経験、家庭環境、発達過程、文化的・言語的背景などを丁寧に理解しようとする保育者の姿勢を養いたい。乳幼児期における言葉の発達は、単なる

語彙や表現の獲得ではなく、人との信頼関係や豊かな生活体験を基盤として育まれるものである。子どもが自分の思いや経験を言葉にし、他者の思いを受け止められるようになるためには、周囲の大人が子どもの声にならないおもいにも耳を傾け、応答的に関わるのが最も重要である。

自分とは異なる考え方や感じ方を尊重し、様々な関わり方ややり取りの方法を工夫して、子ども理解を深める保育者になってほしい。そのため、学生が知識や技術を身に付けるだけでなく、自ら問いをもち、自分の考えを言葉にし、他者とのコミュニケーションを通して捉え直す学びを大切にする。理論と実践を往還しながら学び続ける保育者を育成することを、今年度の教育の理念とする。

教育実践においては、学生自身の話し言葉や書き言葉も育つ学びの場づくりを心がけたい。子どもや学生同士、教員等との関わりを通して、学生自らの保育観や教育観を言語化し内面化していけるような支援を、引き続き行っていきたいと考えている。

3. 教育の方法

授業では、「学生が自ら考え、それを言葉にし、今後の保育実習や就職後の保育実践に結びつけていくこと」を今年度も重視する。講義による知識の習得に加え、グループワーク、ケーススタディ、絵本や紙芝居の読みあい体験、児童文化財の具体的な活用方法、保育・教育現場の映像資料の視聴等、多様な学習方法を組み合わせる。

さらに今年度は、学んだ内容を実践に結びつけるだけでなく、実践を振り返って新たな問いを見いだす「理論・実践・省察の循環」を、より意識した授業を行う。具体的な保育場面について、「子どもはなぜそのような言葉や行動を示したのか」「保育者の関わりは子どもにどのような影響を与えたのか」「他にどのような援助が考えられるか」等を問い、学生が複数の視点から検討する機会を多く設ける。

「保育内容言葉」では、子どもの言葉の発達と、それに関わる人的・物的・社会的環境について理解を深めるため、テキストに基づいた子どもの言葉の発達過程を示すとともに、保護者や保育者、他児との関わりが言葉の発達に及ぼす影響について、保育現場の具体的な事例を交えながら教授した。また、学生が自らの成育歴における言葉や絵本等の児童文化財との関わり、保育体験等で経験した子どもとのやり取りを振り返り、レポートやグループワークを通して話し合ったりレポートに書いたりして言語化した。学生同士が互いの経験や考えを共有することで、一つの事例にも多様な見方があることに気づき、子ども理解を深められるように進めた。こうした双方向的な授業を通して、学生は、知識を受動的に受け取るのではなく、自ら問い、考え、対話し、実践に生かす力を身に付けた。

「

4. 教育の成果・評価

2026年度の前期定期試験前に、学生に対して授業アンケートを実施した。問1：学生自身の授業への取り組み 問2：授業内容 問3：授業の進め方 問4：全体的評価、である。

「保育内容言葉」に関して、学生からの総合評価では「4.3」との数値が出た。昨年度より

コンマ、1のアップとなった。

自由記述からは「とても楽しい授業でした」「普段意識をせず言葉を使っていたが、言葉がいかに大切だということを学んだ」「とても難しい内容ではありましたが、丁寧な説明と話し方でとても分かりやすかった。授業開始前の手遊び歌も、知らない歌が多く楽しかった」「毎授業で新しい手遊びを知ることができ、実習などで活用できるためありがたかったです！」

「保育現場に出てからも忘れないでいたい内容を学べた」等前向きな記述から、子どもの言葉の発達に関して、講義と実技を通して学び、さらに深めている様子が見えてきた。

一方、「教科書やプリントに線(マーカー線)を引く際に先生の読むスピードがはやく、追い付けない」「絵本が見えづらかった」という記述もあり、今後の授業の組み立て方を再考し、工夫を重ねたい。また、文章表現方法には課題のある学生もおり、これまで同様、書く力の支援が引き続き今後の課題である。

5. 教育の改善に向けた今後の目標

(1) 保育内容言葉

短期的目標	① 子どもの言葉の発達過程について、発達心理学的な知見と保育現場の具体的な事例を結びつけながら理解できる授業内容を充実させる。 ② 子どもの言葉や行動を表面的に捉えるのではなく、その背景にある生活経験、家庭環境、発達特性、文化的・言語的背景などを多面的に考察するケーススタディを取り入れる。 ③ 授業後の振り返りや提出物から学生の理解度を把握し、その結果を教材や説明方法、事例の選定に反映させることで、学生が主体的に子どもの言葉の発達について理解を深められるように進める。 ④ 子どもの言葉の発達や保育者としての関わり方について、現代的課題を見据えた教授内容と教授方法を工夫する。 ⑤ 学生個別の力量に見合った文章力向上のための指導法を見出すと共に、子どもの発達に即した言葉掛けの在り方を学ぶ実践的な機会を多く持つ。 ⑥ 学生の言語表現力（記録・レポート・発表等）の育成に向けて、提出物に関する振り返りの機会を増やす。 ⑦ 言葉だけに特化しない総合的な保育の多様な捉え方に関する指導法について、演習を多く取り入れていく。
長期的目標	① 保育界の今後の動向と、「言葉」を巡る今日的課題を見据えた教授内容を、さらに精査する。 ② 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂・改定を見据えた授業内容を構築する

(2) 言葉の指導法

短期的目標	① 「保育内容『言葉』」で身に付けた言葉の発達に関する基礎的な知識を、具体的な保育実践に結びつける授業を充実させる。乳幼児の言葉の発達と、保育内容・指導法の関係について具体的な事例や演習等を通して学びを深める教授内容とする。 ② 絵本や紙芝居の読みあい、素話、言葉遊びなどの実践的な演習に加え、保育・教育現場の映像資料や事例を活用し、保育者の言葉かけや環境構成について学生が具体的に考える機会を設ける。 ③ 模擬保育やグループワークを適宜取り入れ、子どもの姿を想定した指導計画の作成、実践、振り返りを行う。学生同士の意見交換や相互評価を通して、一つの実践にも複数の方法があることに気づき、自らの援助を見直す力を育てる。 ④ 学生個別に対応した指導案の立て方、実践、省察、改善のサイクルを見出す為の内容を工夫する。
長期的目標	① 子どもの発達や興味、生活経験に応じて、言葉を育む環境や援助を柔軟に構想し、実践できる保育者を育成する。あらかじめ立てた指導計画に沿うだけでなく、実際の子どもの言葉や反応を受け止め、その場に応じて計画や関わりを柔軟に調整できる実践力の育成を目指す。 ② 「理論・実践・省察」の循環を通して、自らの言葉かけや保育実践を検証し、継続的に改善していく必要性を身に付けられるようにする。 ③ バイリンガル教育やコンピューター・リテラシー、バリアフリーな言葉に関する教材等も視野に入れた授業の構築を目指す。 ④ 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂・改定を見据えた授業内容を構築する

6. エビデンス一覧

- (1) 各科目シラバス（保育内容言葉、言葉と表現の指導法、保育内容総論）
- (2) 授業時配布プリント（保育内容言葉、言葉の指導法、保育内容総論）
- (3) 試験問題（保育内容言葉、言葉の指導法、保育内容総論・筆記試験）
- (4) 成績集計結果（保育内容言葉）